

卯の花くたしも既に過ぎ、梅雨に入った6月。シトシトと雨が降り出した。山も海も街も等しく濡らす雨。生きるものを育み、地面にしみこみ、流れ、大海に注ぐ。

霞む山々。重そつに頭を垂れる竹藪。しっとり艶やかに生き返る河原の石。葉先で震える雨袋。ぼやけて無口になる広告塔。瓦屋根を伝う雨は黒く光る。

茫茫として寄せくるのは海の雨。鳥々がけぶり、水面にえがく波紋が見る見る近づき、ついには最初の一粒がからだにあたる。

雨には音がある。無数の糸がたまねく降り注ぐ静穏な雨音。天窓や軒先にはパラパラと、さらには雨垂れがボタンボタンとアクセントをつける。雨のアンサンブル。自然の音楽。

雨に寄り添い踊るのは子供たち。色とりどりの傘を振り回し、水溜まりあらば長靴で、ピチャピチャしびきを上げはしゃいでる。

レインコートには少し思い入れが。フランス映画の往年のスター、ジャン・ギャパンやリノ・ヴァンチュラの着こなしのかっこよかったこと。写真ではブレ

雨



とも言えない。そんなレインコートを着ればなおさらだが、雨の日に歩くのが好きだ。うつつしがる人が不思議。雨は町の汚れを洗い流し、清めてくれるかのよう。

昔、酔って夜の街を歩いていると、強い雨が降り出

に井戸水を溜めて使っているところがまだあった。その人たちは雨と通じていたのではないか。便利は人を鈍感にする。雨の日に水を飲む、と言つ言葉。忘れてはならないものへの警鐘として僕に残る。

自然に目を凝らすことで培ってきた人間の知恵。農業や漁業、いわんや他の産業においてもどンドン離れてゆく。そのしっぺ返しは遠に始まっているのを知っているはずなのに。

ソング撮ったジャコメッティ。襟を頭まで引き上げ、肩をすぼめ濡れた石畳を横切る。決定的瞬間。パリッとこかしこまるコートはどうもいけない。雨と埃でちよっとヨレた感じに、人生の確かさと哀愁が漂つ。

僕としては格好もだが、あの全身をすっぽり包む、くだけたフィーリングが何

した。暗い空に口を開け雨を受ける。そのとき「雨の日に水を飲む」と口をついて出た。あたりまえのことを忘れていたと思った。雨ではなく、水道の水を飲んでいたので。いや、当世ではペットボトルの水か。

子供のころは、大きな瓶

熊谷守一に雨垂れを描いた絵があったなあ。彼はいつも手のひらに自然を受けていたのかしら。人々はこの雨垂れをどこに置き忘れてしまったのだろう。

アマダレポタン ポー
ンツン カエルノセナカニ
ポーンツン

(吉田 淳治・画家)